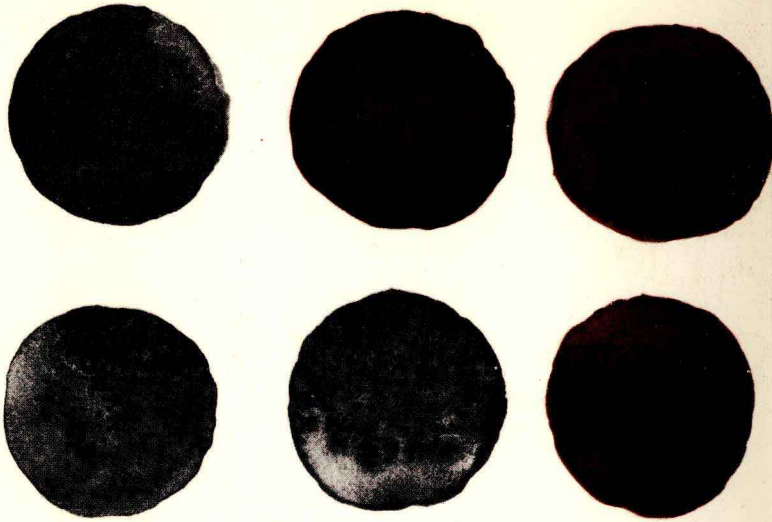
新しい世界の文学



世界の新しい文学の展望

川村二郎・清水　徹・三輪秀彦・菅野昭正
永川玲二・丸谷才一・篠田一士

白水社

著者©
川村二郎
清水徹
三輪秀彦
菅野昭正
永川玲二
丸谷才一
篠田一士

新しい世界の文学 別巻
世界の新しい文学の展望
定価 五〇〇円
一九六七年六月三〇日初版発行
一九六九年六月一〇日再版発行
発行者 草野貞之
印刷者 田中昭三
発行所 株式会社 白水社
東京都千代田区神田小川町三の二四
電話東京(291)七八一一(代)
振替東京 三三二二八
郵便番号一〇一
理想社印刷・大光堂製本

世界の新しい文学の展望

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

世界の新しい文学の展望

川村二郎・清水　徹・三輪秀彦・菅野昭正
永川玲二・丸谷才一・篠田一士

白水社

新しい世界の文学

目次

始原への旅……（川村二郎）7
小説は可能か……（清水　徹）49
ブーヴィルの煉獄……（三輪秀彦）105
絶対の探求……（菅野昭正）145
レアリスムの行くえ……（永川玲二）185
通夜へゆく道……（丸谷才一）221
あとがきにかえて……（篠田一士）275

始原への旅

川村三郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

現代文学に、「神話への志向」といったことばで総括されるひとつの大きな特徴があることは、一応文学読者たちの常識になっていると考えていいだろう。もう少し敷衍していえば、日常的な現実よりはるかに深い層に横たわる別種の現実にわけ入って、その深みから、個体としての特性を離脱し、一回かぎりの時間空間の制約から解きはなたれた、さまざまな人物事象の原型をつかみだそうとする作家たちの努力が、随処で成果をあげているということである。

しかしいうまでもなく、その努力の現われかたにおいては、個々の作家、ないし個々の作品のあいだにはなはだしい逕庭がある。それは幽邃な過去への一途な没入というかたちをとることもあれば、過去の像を意識的に歪曲させて現在の鏡にうつすこともある。神話の粉黛を濃厚にほどこしながら、結局単なる現代人の物語にすぎないこともあり、そうかと思えば、日常茶飯をさりげなくえがいているようにみえて、その奥から超越的な形象がおのずから透けて来る場合もある。さらに、この志向が「現代」文学の一特徴であるという時、前代の文学からそれがどれほど遠ざかっているのか、あるいはどれほどの遺産を受けついでいるのか、その間の消息にも注意を払わなくてはならないだろう。十九世紀文学の主傾向をリアリズムと名づけるならば、この新たな志向は明らかに反リアリズムと呼ばれうる要素をひそめている。日常の現実の忠実な再現が、決して本質的な現実の再現とはなりえない

という反省が、そこにはたらいている。しかしたとえば、十九世紀リアリズムの代表者のひとりバルザックが、現実世界の混沌を描写しながら、その描写の豊饒さのきわまる所に、もはや神秘的としか呼びようのないヴィジョンを喚起することは、何も『セラフィータ』のような特殊な作品に対面する時とはかぎらず、彼を読むもの誰しもの味わう経験であろう。

だから、この問題を考えるためには、鳥瞰的な概括や、単純な新旧対立の図式はさして有効ではあるまい。そのためには、あくまでも個々の作家がはたした成果の、それぞれの場合に即しながら、同時代の横のひろがりと文学の系譜の縦のつながりとのかたちづくる空間に、それぞれの位置を確認する以外に方法はない。展望の広濶さはその際ある程度失われるかもしれない、それぞれの作品は、径の屈折の多少の差はあれ、すべてダイダロスの築いた宮殿に似て、一旦足をふみ入れたが最後容易に脱出することはできないのだから。それらの幽晦な中心をきわめたはてには、ふたたび広大無辺の展望がひらけることを願いながら、テセウスの勝利がその幾分の一の形でなりとも恵まれることを期待しながら、ともかくいくつかの迷宮の中へふみこんでみようと思う。

1

神話を作品の素材とした二十世紀の文学者たちのうちで、量的にもっとも巨大な造型をなしとげたのは、なんといってもトーマス・マンだろう。『ヨゼフとその兄弟』『選ばれし人』はいうまでもなく、『詐欺師フェリクス・クルルの告白』や『ファウスト博士』のような作品でも、神話的な形象、

ないし原力を核心として、その周辺にうずたかく盛りあげられた長篇と見ることができる。さらにはある批評家たちのように、『魔の山』にさえ、神話的な地獄めぐりのヴァリエーションを見てとる論者も存在するのである。

マンの神話についての考え方をうかがうには、ハンガリーの神話学者カール・ケレニイとの往復書簡、ワーグナーに関するエッセイ、『フロイトと未来』と題する講演などが好都合だが、とりわけ最後の、フロイトの八十歳の誕生日を祝う記念講演が有名でもあり、彼の創作理念を要約的に把握するには一番手っ取りばやくもある。その半面、ここでオマージュをささげられているフロイトが、恐れを知らず死と悪魔とのあいだに馬を進める、いささか勇壮活発すぎる「騎士」になりおおせているのと同様に、魂と時間の深みへひそみ入り、典型的なものをもとめるのが自分の作家としての歩みだという、そのマンの自己を語る口調は、いささか整理がつきすぎていて、そうあっさりとわりきることができるものかどうか、疑いをさしはさむ余地がなくもない。しかし少なくとも次に引用する一節なぞは、マン個人のというより、一般的に現代における神話把握の、基本的態度のひとつを、きわめてあざやかにえがきだしているといえよう。

「アレクサンドロスはミルティアデスの跡をたどり、カエサルについては、それが正しいかどうかは別として、彼がアレクサンドロスを模倣しようとしていたということが、古代の伝記作家たちによって信じられております。ところでここにいう《模倣》とは、今日そのことばにひそむよりはるかに大きな意味をもっている、それは、古代世界にはとりわけよく知られていたが、近代にも残存し、精神的な意味ではい

つの時代にもおこりうる、神話的同化を意味しているのです。ナポレオンの形姿に古代的な特徴のあることはしばしば強調されて来ました。彼は、近代意識の層の中では、アレクサンドロスのように、ユピテル＝アモンの息子と名乗ることが自分に許されないのを残念に思っていた、しかし彼が、東洋遠征の時には少なくとも自分をアレクサンドロスと神話的な意味において混同していた、このことを疑う余地はありません。そして後になって、もっぱら西欧だけをおのが目睹においた時、彼はこう宣言した、《朕はシャルマーニュなり》。ご注意ください――《わたしは彼を思いだす》というのではない、《わたしの立場は彼のそれに似ている》というのでもない、《わたしは彼のようだ》でもない、ただあっさりと、《わたしは彼だ》というのです。これが神話の定式です。」

「を思いだす」「のようだ」「似ている」の領域、つまり近代合理主義にもとづく神話解釈の領域に対して、ここでは古代的な同化の理念（というよりむしろ感覚）が呈示されているのだが、それは同時に、古代を新たに発掘する現代の眼の所在をも示すことである。神話研究の分野に関していえば、ここにある懸隔は、ヴィラモーヴィツ＝メレンドルフとヴァルター・F・オットー、ないしカール・ケレニイとのあいだに横たわるそれとひとしい。『古代ギリシャ人の信仰』の中でヴィラモーヴィツは、動物の姿をした神々の生成にふれ、その生成の原因を、森の中で熊や山羊や鹿に出あった時の人間の、恐怖をともなった驚愕にもとめる。立論の正しさを確証するために、この偉大な古典学者は、みずからの経験を語っていう――わたし自身が、かつてアルカディアの峡谷を馬に騎って進んでいて、不意に頭上の木の枝のあいだに一頭の見事な雄山羊を目にした時、パンの顕現を体験したのだ、と。

こういった悠揚迫らぬ「体験」の表白に対しては、ケレニイならずとも、この論証のための現実的

な与件は一頭の雄山羊とベルリン大学の教授との二つだけだと揶揄せずにはおられないだろう。しかしヴィラモーヴィツよりさらに偉大な古代の探究者フレイザーにとってさえ、未開社会の俗信は、たとえ弁護するに足るものとはいえ、やはり「悪魔」なのである、とはすなわち、『アエネーイス』第六歌に歌われた黄金の枝から、雄大な民俗研究の叙事詩をつむぎだしたこの碩学さえ、結局はヴィラモーヴィツ同様、あくまで現代の文明人としての立場から、悠揚たる感情移入の操作によって過去を理解しようとこころみているのである。

フレイザーの『金枝』の初版が発行されて（一八九〇年）から、もうひとつの記念碑的な民俗研究書、レヴィ・ブリュールの『劣等社会の心的機能』（一九一〇年）が現われるまでには二十年の歳月が流れさっている。この二十年のあいだに転換したのは、ただ世紀ばかりではない。過去に相対する態度のある決定的な転換が、この時期に成就している。具体的な業績でいえば、とりわけ美術史の方面での変革、リーグル（『芸術様式』一八九三年）、ヴォリンガー（『抽象と感情移入』一九〇八年）などの仕事が巌のようにそばだち、さらに少しおくれて文明史、文学史の領域でホイジンガやクルチウスの活躍が目だって来るわけだが、それらの多彩な成果の特性を一口で要約するなら、過去をして過去を語らしめようとする、みずからの場という自覚を一旦放下して直接過去の声に耳をかたむけようとする志向にあるといっていいだろう。

この二十年はまた、文学の世界においては、サンボリスムのヨーロッパ制覇の時代であった。目もあやな現実の諸相からその自律的な実在性を奪い、現象の背後に横たわる存在を直覚的な視力によってとらえ、現実の諸相がことごとくそこから展開しそこへ収斂される消息を、ことばの中へからめあ

げようとする文学の営為が、さまざまな偏倚現象をともないながらも全ヨーロッパ的に蔓延して行った時代であった。

そのようなコンテクストの中から、神話をながめるトーマス・マンの現代の視点がさだめられて来る。それはもはや、おのれの悟性による合理化を過去の事象へ及ぼそうとはしない、ケレニイが『神話学入門』の序論でおこなった区別を借用すれば、それは、過去の及びがたい深さを認めた上で、神話を「説明（エアクレーレン）」しようとはせず「根拠づけ（ベグリュンデン）」ようとする、説明によって過去をみずからの理解の体系にもちこもうというのではなく、理解にあまる存在を、その存在のありかたのままに受け入れ、その根拠をきわめようというのである。これは一見、学問的潔癖、禁欲的リゴリスムとみえるかもしれないし、そういって誤りではないかもしれない。しかしいわゆる無私の精神の立場ではない、完全な無私の領域では精神はそもそもその存在を喪失せざるをえなくなるものだろう。むしろこれは、根拠づけという手つづきを経て、前代の眼にはうつらなかったもの、眼にしようのなかったものを、まざまざと視界に収めようという、野心にみちあふれた新たな精神の活動を証しているのである。そして、この活動のおもむく所、近代意識の不抜の前提であった個性化の原理は消滅し、ひとりの人物はそのまま別の人物となり、カエサルはアレクサンドロスとなりナポレオンはシャルマーニュとなり――、そして、古いユダヤの族長ヤコブの息子ヨゼフは、くり返し創造の第一日にたちもどる神話的な永劫回帰の中で、アドニスとなりオシリスとなりヘルメスとなり、ついには、亡命者をやさしくはぐくむアメリカ合衆国の大統領にさえ、なるはずであった。

ぼくは今、「なるはずであった」と書いた。こういう書き方の曖昧さは、明快な断言によって即座

に補われる必要があろう。しかしそれは容易でない。強いて補えばこういうことになるだろうか、「たしかにそうなった、しかし、本質的には、ならなかった」と。

理解を絶し、語るすべもない領域の事物について、なおあえて語るためには、おそらく二通りの方法がある。ひとつは、対象の名状しがたさに、そこにひそむ沈黙に能うかぎり接近し、みずからも沈黙とほとんど弁別しがたい境界に身を横たえながら、辛うじて得られた片言隻句のみに万斛の重みをもたせかける方法。外延の禁圧によって内包の無限な豊かさをめざすこの方法に対して、もうひとつは、野放図に外延を拡大し、渦巻く饒舌、過剰な表現を極端にまでたかめ氾濫させ、その渦に惹起された眩暈に、名状しがたい存在の幻像をかいま見させる、あるいは少なくとも予感させる方法。

トーマス・マンはいうまでもなく後者の方法をとった。旧約聖書の眇たる一説話をとりあげて四部五千枚の大長篇にふくれあがらせた時、彼は明らかに意図して一切の外的な抑制を放棄していた。細密をきわめた描写には同じく細密をきわめた註釈をつけ加え、註釈にはさらに註釈を重ね、そのはてしない連鎖が巨大な結節動物のようにうねりのたうつ、この叙述法にはほとんど「真空への恐怖」とでも呼びたくなるほどの充溢感がある。一見それは十九世紀リアリズムの大作家たちのあとを追う努力のようにみえるし、ある意味でマンがその作家たちの直系であることはもちろんかくれもない事実だが、それにもかかわらず、現実を「真らしく」描こうとする努力、現実の形相を可能なかぎり忠実にうつしだそうとするこころみとは、『ヨゼフ』の叙述法は微妙に異なっている。いやむしろ実は、この放恣きわまりない饒舌体は、聖書の物語という形で、一応の体をなしている叙述の対象を、完膚なきまでに分解し拡散し、一種非現実的な抽象の局面にそれを再構成しようとする、強引な企てのた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com